

学習場面における自己調整メカニズムについての検討

寺 田 未 来

広島大学大学院総合科学研究科

Examination of the Self-Regulation Mechanism in Study Scene

Miki TERADA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

自己調整 (Self-regulation) とは、ある目標を充足させるために自らの動機・思考・感情・行動を望ましい状態に変化させ体系的に管理する一連の心理過程を指す。Tangney, Baumeister, & Boone (2004) は自己調整を、ある行動への動機づけを高め、別の行動に対する欲求を抑制しコントロールしながら行動を活発化させる一連の過程と定義する。本論文ではいかにして学習者を自己調整的な学習者に育てるのか、いかなる指導・評価が効果的であるのかという問いに答えるための端緒として、学習者がいかにして自らの学習を動機づけ、効果的な学習活動を形成しているのかというメカニズムを検討し、その自己調整メカニズムを示す新たな理論的モデルを提案し妥当性を実証した。具体的には学習者一人ひとりの個人差要因として学力の高さと学習動機の他律性-自律性の違いに着目し、この2つの要因が自己調整に及ぼす影響を検討した。その結果、自律動機や学力の高さは自己調整スキルの高さと関連する一方、学習動機と学力のいずれかのネガティブな影響が自己調整のスキルに負の影響を与えていることが示された。さらに2つの要因の組み合わせによる効果の背景にある心理メカニズムが、自己調整

の働きを説明するための枠組みであるMuraven & Baumeister (2000) の提唱した限定資源モデルに基づいた検討の結果、明らかになった。また実証した自己調整メカニズムを示すモデルの精緻化、拡張可能性についても議論された。総括において自己調整メカニズムを整理し、学習者にとっていかなる指導・評価が効果的であるのかの応用的提言をまとめ、学習に対する自己調整への促進要因について考察した。

第1章では、現代の教育背景を踏まえた問題の所在を明らかにし、学習場面における自己調整に着目した本論文の研究目的をまとめた。自己調整に関する諸理論及び研究をレビューし、その問題点を指摘したうえで新たな観点として社会心理学領域からのアプローチの必要性を論じた。さらに学習場面における自己調整の働きを説明するメカニズムを規定するものとして、学習動機と学力に着目する理由について述べた。最後に本論文の意義及び基本仮説を述べ、本論文の枠組みをまとめた。

第2章では、まず自己調整の観点から日頃の学習活動を測定する新たな尺度を作成し妥当性の確認を行った。その結果、日頃の学習活動は“内容理解・習熟の調整”、“学習態度・姿勢の調整”、“自己調整の欠如”の3因子に分類できた。また各学習

活動と学習関連諸変数との間に想定した関連が認められ妥当性が確認された。次に、作成尺度を用い、学力と学習動機が自己調整に与える影響を探索的に検討した。その結果、自己調整に対し学力と学習動機の交互作用的影響が認められた。学力の上位群と下位群において学習動機と自己調整のスキルの指標との関連性に違いがみられ、学習者のタイプごとに特徴を考察した。自律動機や学力の高さは自己調整を促す一方、学習動機と学力のいずれかのネガティブな影響が自己調整のスキル形成に負の影響を与えていることが示唆できた。

第3章では、実験的手法を用い課題動機と有能感が自己調整に与える影響を限定資源モデルに基づき明らかにした。90名の大学生を対象とした実験室実験の結果、課題動機と有能感の両要因が自己調整の異なる2側面である目標遂行及び衝動抑制にそれぞれ影響を与えることが示された。具体的には課題動機の他律性-自律性が衝動抑制に、有能感の高さが目標遂行に影響を及ぼし、それぞれの効果が排他的役割をもつことがわかった。さらに限定資源モデルの観点から両要因の交互作用効果により自己調整資源の枯渇が引き起こされる過程が明らかとなった。

第4章では学習者が自らの学力に対してもつ信念として、自己の属性(特に、能力)の捉え方に関する知能観に着目し、学習者が自らの学力や能力に対してもつ知能観の違いが自己調整における資源の枯渇あるいはその緩和過程にいかなる影響を及ぼすのかを検討した。その結果、自己調整資源

の枯渇-緩和過程は、個人がもつ知能観の違いにより調整され、増大的知能観をもつ者においてのみ認められることが示された。本結果は、知能観の違いが達成行動に及ぼす影響を自己調整の限定資源モデルから捉えた知見といえる。

第5章では、自己調整が適応指標に与える影響を明らかにするとともに、自己調整と適応指標に影響を与える対人環境に着目した。まず、家族成員や親密な友人からのサポート受容とハイメンテナンス相互作用に着目した。その結果、親密な他者からのサポート受容が自己調整を促す過程が示された。人が生得的にもつ3つ目の欲求として関係性の欲求の充足が自己調整に重要な役割を果たすことがわかった。次に、家族成員の養育態度と家庭環境に着目した。その結果、養育態度におけるケアが自己調整を促進し、過保護が自己調整の抑制と関連していた。さらに熟達目標構造をもつ家庭環境は自己調整を促進するのに対し遂行目標構造をもつ家庭環境は自己調整を抑制することが示された。

第6章では、研究全体を総括し研究評価を行った。自己調整メカニズムの新たなモデルの構築について考察し、本論文の理論的、実践的貢献をまとめた。さらに、教育現場において求められる学習者への理解や指導の提言を論じ、まとめた。最後に本論文での今後課題と展望を述べた。今後、基礎研究に立脚したアプローチによる検討と現実場面での実践的検討による統合的理解が望まれる。